特集

出荷技術で経営が変わる！

肥育豚の管理は養豚の総仕上げ

～日常管理の見直しポイント～

ピッグケア　田中 正雄

交配に妊娠豚管理、哺乳や子豚管理、これらに力を注ぎ込んできた総仕上げが肥育管理です。ともすれば、軽視しがちな肥育豚管理ですが、この良否によって農場の収益は大きく違ってきます。

より良い出荷豚を作出するための肥育豚の日常管理に焦点を当ててみます。重要な項目がたくさんありますが、1つひとつ確認と点検をしてください。

1．肥育舎の導入準備

(1)オールイン・オールアウトは実施していますか?

豚の病気はほとんどが豚同士の接触感染、排泄物を介しての感染です。従って、豚を肥育舎(部屋)に導入する場合、それまで飼養していた豚をオールアウトして、水洗・消毒・乾燥を実施しておくことが重要です。分娩舎、子豚舎のオールイン・オールアウトを実施している農場は多くなりましたが、肥育舎で実施できている農場はまだまだ少ないようです。しかし、実施してみるとその効果が実感できるのがオールイン・オールアウトです。

(2)導入時の肥育豚房の豚の体重を揃えていますか?

豚は非常に発育の早い動物です。また、発育に応じて給与飼料が変わります。

肥育舎導入時の豚房内の体重の不揃いは、日を追うごとにますます大きくなります。出荷体重を均一にするためには、肥育開始時に各豚房の豚の体重をできる限り揃えておくことが重要です。

(3)導入時のトイレのしつけはしていますか?

肥育豚が真っ黒に汚れている豚舎を見かけます(**写真1**)。健康に良いはずがありません。極度に暑い場合を除き、豚は豚房をきれいに保とうとする動物です。そのためには、導入時のしつけが必要ですので確認してください。

写真1　しつけが悪く、寝床が汚れている豚房

①トイレの場所は導入前から濡らしておく
②寝床には飼料、オガ粉を散布しておく
③隣接豚房と寝床の境界は遮断し見えないようにする

(4)去勢はしてありますか?

ときどき肥育舎で去勢がされていない豚が見られます。日本では、去勢されていない豚は、いくら枝肉の評価が良くても黙って並まで落とされるケースが多いです。肥育舎での去勢は豚に大きなストレスをかけるだけでなく、労力増加や傷口の化膿の可能性も高くなります。必ず、去勢は離乳前に実施してください。

(5)病豚房は設置してありますか?

突然の捻挫や発熱、下痢が発生するときがあります。そんなとき、その豚を豚房内にそのまま入れておくと、飼料が食べられなかったり、豚房内のほかの豚にいじめられ、回復が遅れて発育不良に陥ります。これを防ぐためには、豚舎(部屋)に病豚専用豚房をあらかじめ用意し、事故が発生した場合の隔離に利用します。これによって、事故の豚の回復だけでなく、伝染性疾病の蔓延防止にも役立ちます。

2．肥育舎の環境設定の重要性

(1)温度、換気、収容密度は大丈夫ですか？(表1)

寒い豚舎、換気が悪い豚舎、詰め込みすぎの豚舎。誰もが

表1　肥育豚の適正環境の目安

肥育豚体重	～25kg	～50kg	～75kg	～出荷まで
適正温度：℃	21～23	19～21	18～20	16～20
適正換気量：㎥／体重kg／時間（最低適正温度以下の温度）	0.3	0.3	0.3	0.3
適正換気量：㎥／体重kg／時間（最高適正温度より5℃高温時）	1.0＜	1.0＜	1.0＜	1.0＜
適正密度：㎡／頭　（半スラット床）	0.3＜	0.6＜	0.8＜	1.0＜
適正密度：㎡／頭　（全スラット床）	0.25＜	0.4＜	0.6＜	0.8＜
適正出水量：L／分	0.5	1.0	1.0	1.0

経験することだと思います。肥育舎に収容能力以上の頭数が導入されたり、暑さ、寒さで発育が停滞した場合など、豚舎はパンク寸前になることがあります(**写真2**)。

適正な温度、換気、密度が保たれない場合には必ず豚の健康状態は悪化します。その結果、増体減少、要求率の悪化、疾病発生、事故の増加などにつながります。計画生産がもちろん重要ですが、適正な環境が保たれるよう、収容能力以上の豚は外部へ販売することも検討しましょう。

(2)給餌器の食べ口数、給水器の数、出水量は大丈夫ですか?

豚の睡眠時間はほぼ決まっています。起きている時間に飼料摂取をするわけですが、給餌器の食べ口数や、出水量が不足すると、全頭が十分に食べられなくなります。その結果、発育遅延、発育のバラツキが出てきます。とくに、前述したように収容頭数がオーバーした場合には、その影響は大きくなります。もう一度、環境条件を確認してください。

3．飼料給与のことで一言

(1)体重、日齢に合った適正な飼料を与えていますか？

農場によっては、早く発育させるために肥育期まで人工乳後期の飼料を与えたり、コストダウンのために、早めに飼料を切り替えたりしていることがあります。しかし、結果はほとんど良くありません。

豚は成長が早く、給与飼料の数も多く、餌付から出荷までに最低でも5～6回飼料の変更をします。このことは、豚には日齢に合った飼料を適正に与えることが、発育、健康に良いことを意味しています。

(2)豚や施設に合った飼料を使用していますか?

肥育豚舎の給餌器の周りに飼料がたくさんこぼれているのを時々見かけます。ある一定の期間だけ下痢が発生している農場も見かけます。もう少し背脂肪が厚くなってくれたらと苦労している農場もあります。こんな時、形状、内容の違った飼料を与えるとこれらの問題が意外と改善されることがあります。ぜひ、試してみてください。

写真2　横になって寝られないほどの密飼い豚房

4．病気対策はデータ採取と日常の管理から

(1)病性鑑定を行っていますか?

毎日まいにち、肥育舎で豚に注射をしている姿を見かけます。何の病気かと尋ねると、「肺炎」と答えが返ってきます。しかし、病名、病原体の薬剤感受性試験を基に薬剤選択をしている農場は意外と少ないことに驚きます。

事故が起きたら、病性鑑定を実施し、結果に基づいた適正な対策(抗菌剤による治療と予防、ワクチン投与、管理改善など)を実施してください。

(2)と畜場データを活用していますか?

と畜場のデータには格付け、枝重、単価、格落ち理由等のほかに病気の状態が細かく記録されています。

肺炎の種類、肝臓の病気、小腸・大腸の病気などが主な内容です。肥育の成績改善には群全体の罹患状況を知ることも大切です。この記録と病性鑑定結果からの対策がより効果的になります。

(3)早期発見、早期対応、早期隔離をしていますか?

何と言っても、重要なのは毎日の管理です。異常を見つける「目」です。早く異常豚を見つけ、対応し、必要に応じて隔離することにかかっています。さらに、個体の観察だけでな

く、群全体や豚を取り巻く舎内環境にも気を配り、改善を図ることです。

5．オガ粉豚舎の注意点

(1) オガ粉床の発酵状態はどうですか？

オガ粉豚舎の利点は数多くあります(**写真3**)。①管理の省力化、②設備投資が少なくて済むこと、③尿処理がいらないこと、④寝床が暖かく暖房費節減につながること、⑤ハエの発生がおさえられること、⑥良い堆肥が作られることなどです。

しかし、これらはすべてオガ粉床の発酵状態が良いことが条件です。豚の状態が気になった場合はオガ粉床の確認をしてください。ポイントは水分の含有率と、豚がいかに床を踏み込んでいるかです。

(2) オガ粉床は毎回取り替えていますか？

オガ粉床には豚から排泄されたふん尿、分泌物など由来の多くの病原体が存在します。原則として肥育1サイクルで、全オガ粉を交換するのが理想です。同じオガ粉の使用を重ねるごとに発育の遅れ、事故率の増加が目立ってきます。とくに、消化器疾患、寄生虫病が問題になります。どうしてもオガ粉床を再利用する場合は、完全に発酵させてから利用することと、疾病の予防対策をしっかりと立てることが必要です。

写真3　ゆったりしたオガ粉豚房

最後に

肥育舎の豚はまさに「お金」です。たくさんの愛情とお金をかけて育ててきた豚です。出荷すれば即お金になります。でも、肥育舎の管理によって、その価値は上がりも下がりもします。ときには、事故でゼロになってしまいます。今回の記載内容を再度確認して、より良い肉豚の出荷に役立てていただきたいと思います。